

独占欲強めの幼おきな馴な染じみと極甘結婚

第一章 もう一度新婚生活を始めよう

桜の開花宣言が都内にも届く頃、私——松坂ふゆは病室の窓から蕾をつける桜の木を眺めていた。病院の駐車場から出てすぐの道路は桜の木が何十本も並んでいて、三階の窓から見える景色は壮観だ。

(いけない……景色を見る場合じゃなかった……っ！)

看護系の大学を卒業した私は、都内にある総合病院で看護師として働いている。

ようやく四月から二年目に入る二十三歳の新人だ。まだ仕事に慣れるだけで精一杯だし、先輩看護師の足を引っ張ってばかり。手を止めてうつとりと景色を眺めている暇などないのだ。

一年目はプリセプター制度で、先輩看護師からマンツーマン指導を受けられたが、二年目からは一人で患者を担当することになる。患者の命を預かる身として失敗は許されない。身の引き締まる思いだ。

「翔子ちゃん、検査に行こうか」

先輩看護師が車椅子を用意しながら病室に入ってくる。

担当患者である小鳥遊翔子ちゃんは、手術のために何度も入退院を繰り返している、高校一年生

の女の子だ。病状は少しずつよくなっていて、おそらく今回が最後の手術と言われている。退院の日も近いことから、彼女の顔は明るい。

「うん。あ、ふゆちゃんと一緒に行ってもいい？」

先輩看護師の声かけに、翔子ちゃんはちらりと私の方へ視線を送った。

「いいわよ。翔子ちゃんは、松坂さんが好きね」

「うん。この頼りない感じが好き」

先輩看護師が笑って言うと、翔子ちゃんは弾むような声で答えた。

「もう……翔子ちゃんってば！ 私だってもうすぐ一人で患者さん受け持つんだから」

翔子ちゃんは、私が初めて受け持った患者さんで、ほかの患者さんよりも思い入れが強い。

「じゃあ、行こうか」

翔子ちゃんを車椅子に乗せて放射線科へと検査に向かう途中、すれ違った小学生くらいの男の子が私を指差して「あの看護師さん、ちっちゃー！」と言った。横にいた小児病棟の看護師が「そういうこと言わないの」となんの慰めにもならない言葉をかけている。

（わかってますよーちっちゃいの）

一五〇センチに届かない身長に、染めていない真っ黒の髪。それに加えて顔立ちが幼いから、私服で外を歩いているとたまに中学生に間違えられる。

最近はずすがに小学生に間違えられることはなくなったが、数年前まではおまわりさんに度々呼び止められ「こんな時間に一人で歩いていたらだめだよ。お家どこ？」と聞かれ、そのたびに身分

証を提示していたものだ。

（もう慣れたけどね……）

翔子ちゃんの車椅子を押してエレベーターに乗り込むと、彼女は車椅子を押す私の手をじっと見つめていた。

「どうかしたの？」

どこか痛むのだろうか、車椅子を動かす手を止めて聞くと、翔子ちゃんは口元を緩め白い歯を見せた。

「ふゆちゃん、結婚してたんだね」

「あ……っ、ごめん。外し忘れてた」

慌てて左手の薬指からシンプルなリングを抜いてポケットにしまう。いつもはロッカーで外してくるのに、今朝はバタバタしていてすっかり忘れていた。

私は自分の結婚を仲のいい友人にしか明かしていなかった。名字が変わる関係で職場には報告したが、結婚式も新婚旅行もしていない。

「ねえねえ、いつ結婚したの？」

さすが高校生。恋愛には興味津々といった様子だ。翔子ちゃん的笑顔に絆されて、私は移動しながら、聞いてもさして楽しくないだろう結婚生活について話し始めた。

「十八歳だよ……でも」

「ええええっつ？ なに、もしかしてデキ婚？」

私が続けようとした言葉を遮って、翔子ちゃんが驚きの声を上げた。結婚した年齢が若過ぎて、翔子ちゃんがそう思うのは仕方がない。

「でも、ふゆちゃん、子どもいるって感じしないよねえ」

「デキ婚じゃないよ。彼とは幼馴染みの」

「なにそれっ、憧れる〜！ 幼稚園から一緒、みたいなの？」

これから検査だというのに、翔子ちゃんのテンションがどんどん上がっていく。楽しんでくれるなによりだが、結婚生活なんてほとんどないに等しい。

私が赤石改め——松坂ふゆとなって、五年。

五年も経てば、夫とは愛だの恋だのでケンカすることはなく、平穏な毎日過ごしている——とはならず。

五年経っても、新婚のように行ってきますのキスをして、おかえりなさいのキスをする、おしどり夫婦——ともならず。

夫である純也さんと私は、結婚以来ずっと別居状態なのだった。

この五年間、彼とはひと月に一度顔を合わせる程度。休みの日には会いに来てくれるものの、私のシフトの関係で会えない日も多く、週末婚どころか月末婚だ。さらに言えば、私は結婚してから変わらず実家暮らしである。

幼い頃から大切にされているし、一応恋愛結婚で、マメな彼からは毎日「おはよう」と「おやすみ」の連絡が必ずくる。

でも、メッセージは頻繁にあるものの、前に電話で話したのはいつだったか。

「小さい頃から一緒だったけど、翔子ちゃんが想像してるような感じじゃないよ？」

「じゃあ、どういう感じなの？ どうやって結婚ってなったの？ 私、恋愛経験ないから教えてくんなきゃわかんない」

「結婚したのはね……」

私は懐かしさに目を細めながら、純也さんとの出会いを思い出す。

東京都渋谷区、私がこの町で暮らし始めたのはまだ物心つく前、三歳の頃らしい。

我が家は普通よりも少しだけ裕福な程度のごくごく一般的な家庭だ。総合病院で医師をしているお父さんと、看護師をしているお母さん。

誕生日やクリスマスプレゼントは当たり前にもらえたけど、誕生日もクリスマスもお父さんとお母さんは仕事で家にはいなかった。

両親が仕事でほとんど家にいないため、私は生後半年から保育園に預けられていたらしい。でも、私が三歳の頃に引越した渋谷区で預け先がなかなか見つからず、どういう経緯でそうなったかはわからないが、私はお隣の松坂家に預けられることになったそうだ。

だから松坂家の一人息子である四歳上の純也さんは、私にとって物心つく前から当たり前前にそばにいるお兄ちゃんだった。

太陽の光が当たるとわずかに明るく見えるさらさらの黒髪に、大きな目。そして、目を覆いそうなほど量の多い長い睫毛。おとぎ話に出てくる王子様はこんな感じだろうかと思像した。

「かっこいいね」

あとから松坂家のお手伝いさんに聞いた話だと、純也さんを前にした私の第一声がそれだったそう。覚えてないけれど。

松坂邸は、低い石垣と和の雰囲気のある外壁に囲まれた二階建ての屋敷だ。まるで旅館に来たみたい。立派な数寄屋門を潜って中に入ると石畳が続いている。

広い庭には池があり、その先にこれまた趣のある引き戸の玄関があった。L字形に造られている木造の和モダンな邸宅だ。

両親が仕事の時は隣家に預けられるようになった私は、小学校に上がっても、しょっちゅう松坂邸に遊びに来ていた。庭は季節ごとに花が植え替えられていて、それらを眺めながら純也さんと鬼ごっこをしたり、水遊びをしたりするのが楽しかった。

お父さんが冗談で「ふゆはパパよりも純也くんが好きなんだね」なんて言うくらい一緒にいた。仕方がない。だってお父さんは、私が起きているうちに家に帰ってこないのだから。

その日も私は、学校から帰って家にランドセルを置き、そのまま松坂邸の門を叩く。純也さんが私を迎えに来てくれて「お邪魔します」と靴を揃えて中に入った。

「ふゆ、母さんがケーキできたって」

「やった！」

うちよりもずっと広いリビングのテーブルにはホールケーキと紅茶が用意されていた。純也さんのお母さんが淹れてくれる紅茶はすごく美味しい。

私はいつもの定位置、純也さんの隣に座って手を合わせる。

「いちごのケーキ！ いただきます！」

「いちご好きだもんな。ふゆのために母さんがたくさん買ってたよ」

私は頷いて早速ケーキの上に載りたいちごを頬張る。純也さんはいつも表情を変えずにケーキを食べっていて、あまり嬉しそうじゃない。私なら毎日ケーキでもいいのに。

ちらつと横を見ると、純也さんのケーキにはなんといちごが三つも載っていた。私のは、今食べた分を入れて二つ。むうつと唇を尖らせ、羨ましげにいちごに目を向ける。

「俺、ちよつとでいいから、ふゆにあげるよ」

純也さんが自分のケーキを半分ほど切って、私の皿に載せてくれた。なんといちごまで。

「いいのっ？ ありがとう！」

どうやらしょっちゅうおやつにケーキが出るらしく、飽きたと純也さんは言っていた。なんて羨ましいんだ。

「取れない……」

小学校一年生になっても食べるのが下手な私は、お皿の上でいちごごと必死に格闘していた。フォークをうまくいちごに刺せなくて、コロコロと転がしてしまう。

いちごが取れないことに苛立ち、私はついにフォークを皿に置いた。

「純也お兄ちゃん！ いちご取って！」

あーんと口を開けて純也さんが食べさせてくれるのを待つ。純也さんは仕方がないなど、私のフォークにいちごを刺して食べさせてくれた。

「もつといちご欲しい」

私がねだると、純也さんは冷蔵庫からいちごを出してくる。

「純也さんは、ふゆちゃんを甘やかし過ぎですよ」

お手伝いさんが苦言を呈する。

「甘えられるうちは甘えておけばいいんだよ」

純也さんはお手伝いさんの言葉をさらっと流し、冷蔵庫に入っていたいちごを洗って、私の皿に載せてくれた。さすがにお手伝いさんは呆れ顔だ。

「美味しい？」

「美味しい」

私がへらつと笑うと、純也さんも相好を崩す。

毎日、学校から帰ったらお隣へ行き、純也さんと過ごした。

お菓子を食べて一時間ほど部屋で遊んで、また庭で遊ぶ。

夜六時半過ぎにお母さんがお迎えにやってくる。私はいつもこの時間が嫌だった。

だって明日まで純也さんと離れなければならない。ずっと一緒に遊べたらいいのに。

「ふゆ、また明日な」

「うん。明日ね……」

そう言ったものの、高学年は授業の数が多いため一年生の私よりも下校時刻が一時間以上遅い。

私はそれが寂しかった。同じ学年に生まれていたらもつと一緒に遊べたはずだ。心の中でため息を漏らす。

たぶん、小学校一年生のこの頃に恋心を自覚したように思う。

どうすれば純也さんとずっと一緒にいられるのだろう。毎日そんなことばかり考えていた。小学校の友達に相談すると「結婚すればいいんだよ！」と返ってきて目から鱗が落ちた。

そうだ。お父さんとお母さんも結婚して一緒に住んでいる。どうして思いつかなかったのだろう。結婚したらずっと一緒にいられる。大好きないちごと一緒に食べられる。

「私ね、大きくなったら、純也お兄ちゃんと結婚する」

私は早速、迎えに来たお母さんに訴えた。するとお母さんは笑顔で「はいはい」と私の話を流した。お母さんは忙しいからいつでもそうやって私の話を流す。私は本気なのに。

だから、次の日の日曜日、私は仕事か休みの両親に黙って家を抜けだし松坂家に行った。部屋にいないことに気づいたお母さんが慌てて松坂家に来て平謝りするのを横目に、純也さんに手作りの婚姻届を差しだしたのだ。

「これ書いて」

「なにこれ？」

「婚姻届！ 純也お兄ちゃん、十年経ったら私と結婚してくれる？ 知ってる？ 女の人はね、

十六歳から結婚できるんだって。そうしたらずっと一緒にいられるでしょ？」

玄関で挨拶をしていたお母さんは、嘩然とした様子で口をぽかんと開けて固まった。

「法改正で女性の婚姻開始年齢が十八歳に引き上げられるから、十年後じゃ結婚できないよ」

純也さんはお母さんみたいに流しはせず、一頻り考えてからそう言った。

「ほうかいせい？ 私たち、結婚できないの？」

泣きそうになる私の顔を見てまずいと思ったのか、慌てて「結婚はできるけど」と付け足した。

「ふゆが高校を卒業したら結婚できるよ」

「わかった！ じゃあそうしよう、約束ね」

高校がなんなのかさえわからないまま、私は強引に純也さんの小指を引っ張って指切りげんまんをした。そして手書きの婚姻届にその場でサインをさせてお母さんの前に差し出したのだ。

「お母さん！ 聞いたよね？ 私、十八歳になったら純也お兄ちゃんと結婚するから！」

「純也くん、ふゆがいつもごめんね」

「なんでごめんねなのっ!? 私にも悪いことなんかしてない」

あちゃーとお母さんが顔を覆う。面倒くさいことになった、とでも思っていたのだろう。お母さんは純也さんのお母さんにも同じように謝っていた。

「そうだね。悪いことはしてない。わかった、十八歳になったら結婚しよう」

「うんっ！」

純也さんは私の髪を撫でながら「約束だ」と言った。私のプロポーズは大成功だ。純也さんに抱

きつき、頬にちゅつとキスをする。

純也さんは動かずに固まっていたけれど、お母さんは恋に浮かれた娘になす術なしと項垂れて、もう一度純也さんのお母さんに頭を下げた。

それから中学高校と有名私立へ通うことになった純也さんとは、会う頻度はかなり減ってしまっただけれど、私が高校生になっても仲のいい幼馴染みの関係は変わらなかった。

そして、純也さんに対する私の想いも変わらない。初恋はずっと初恋のままだ。会うたびに、やっぱり好きだなあと思う。

だけど、年齢を重ねたことで見えてくるものがある。

たとえば、純也さんは誰が見ても美男子であること。家柄もさることながら、国立大学に入学し将来性ばっちりの有望株であること。そして、そりやもう半端なくモテること。

これだけ完璧な男性はそうそういない。女性からしたらなになんでもお近づきになりたいはずだ。家にまで彼を訪ねてくる女性を何度も見かけた。

そのたびに苛立ちと焦燥を感じるものの、相変わらず純也さんは私のことをベタベタに甘やかしてくるから密かな優越感に浸れるのだ。

(まあ、それが恋愛感情じゃないのは明白だけどね……)

彼が私を妹みたいに思っているのは常々感じていた。現実を見ると、これまで何度も自分に言い聞かせてきたけど、うまくはいかなかった。

はああ、と深いため息をこぼしながら、純也さんの部屋のベッドで左右にごろごろと転がる。純

也さんはタブレットを手になにか調べものをしているようだ。時折、私の方を見て微笑む。小さい頃となに一つ変わらない顔で。

(見た目、中学生の時とあまり変わっていないからな……)

花柄のシャーリングワンピースは本来膝上五センチほどのはずなのに、私が着ると膝丈サイズ。透け感のある生地のため、中にシヨートパンツを穿いている。ちなみにサイズも中学生から変わっていない。純也さんと身長差はついに三十センチを超えた。

純也さんはいえ、王子様的な外見はそのままにぐんぐんと身長が伸び、一八〇センチを超えたらしい。瘦身に見えるが触ると腕や腹筋、胸筋はかなりがっしりとしている。表情なく立っていると精巧な人形のように見える整った顔立ちは、私を見るとふわりと花が綻んだように緩む。私に向けられるその微笑みは見蕩れるくらい綺麗で、何度も胸をときめかせている。

純也さんを目で追う女の子の数は年を重ねるごとに増えていき、私が隣を歩いていたところで牽制になりもしない。

(せめてもうちょっと肉付きがよければなあ)

子ども体型の私の足に、純也さんはドキツとなんかしないだろう。肉は少なめでひよろひよろだし、うつ伏せになって潰れるほどの胸もない。

私のため息を勘違いしたのか、椅子に座っていた純也さんがおもむろにベッドに腰かけ、ぽんぽんと優しく私の頭を叩く。

私は頭の上にある純也さんの手をぎゅっと掴み、手を繋いでみた。そして純也さんの顔をちらり

と覗き見るがやはり顔色一つ変わらない。それどころか、逆に指を絡ませ手を繋ぎ直された。

「どうした？ テストの結果、おばさんに見せて怒られたのか？」

彼は手を繋いだまま言ってきた。

怒られて落ち込んでいると思つたらしい。たしかにそれも悩みの種ではあるのだが。

「……絶対怒られるってわかって、見せられるはずないよ」

純也さんがわざわざテストの山まで張ってくれたのに、結果は散々だった。

自分の勉強だって楽じゃないのに。教師より綺麗な字でまとめたノートを私のために作つてこの点数だと、さすがに純也さんに対して申し訳なくなってくる。

私が肩を落として謝ると、空いた反対側の手で私の頭をぐしゃぐしゃに撫で回してきた。

「次、頑張ればいいだろ。おばさんには俺から言っておいてやるから」

「ほんとっ!? ありがとう!」

手を離して純也さんの身体に思いつき抱きつくど、ぐらりと彼の身体が揺れて後ろに倒れ込んでしまう。胸が純也さんの腹部に当たって、私の顔は骨張った鎖骨に埋まった。

「う、ぐ……っ」

「ふゆ、くすぐりたい」

私の鼻息がかかったのか、純也さんはひよいと私の身体を簡単にどかして起き上がる。もう少し抱きついていたらかったのに、残念。

その数日後。

私の成績を知ったお母さんと純也さんの間でどんな話し合いが行われたかは知らないが、あれよあれよという間に、純也さんが家庭教師になることが決まっていた。

「ふゆ、今日からよろしくな」

純也さんは半袖シャツに細身のパンツというスタイルで玄関に立っていた。手には大きめのトートバッグ。おそらくその中に勉強道具がぎっしり入っているのだろう。

「うん、よろしくお願ひします」

純也さんにとっては勝手知ったる我が家だ。挨拶もそこそこにキッチンに入り手を洗うと、私が中途半端に用意していた麦茶のグラスに自分でお茶を注いだ。私の分も入れてどうぞと勧めてくる。

「なんか……純也さん、また背伸びた？」

首が彎りそうになるほど高い位置にある頭を、私は恨めしく思いながら見つめる。身長一五〇センチにも満たない私とは身体の造りからして違うのだろう。

「一週間前に会ったばかりだろ？ そんな急に伸びないって」

「ええ、そうかな？ 伸びた気がする。もしかして……私が縮んだの？」

少し前までは私の頭がかるうじて肩に届いていた気がするのに、今は届かない。

今でも二人で歩いていると、妹の面倒を見るお兄ちゃんにしか見えないのに、このままでは娘になつてしまう。

私がつま先を立てて背伸びをすると、近づいてきた純也さんに頭を撫でられた。

「ふゆはちっちゃくて可愛い。身長なんて気にするな」

わしわしと髪をかき混ぜられて純也さんの胸に引き寄せられる。

彼は小さい頃と変わらず溺愛してくるので、たとえ私がミジンコサイズでも可愛いと言うはずだ。

「どんだん私との身長差が開いちゃう……わっ」

すると私の脇の下に手を入れた純也さんに、軽々と持ち上げられて足が宙に浮いた。一八〇センチの目線が思っていたよりも高くてびっくりだ。

「こうやって簡単に抱き上げられるのがいい」

楽しそうに私を抱き上げてくるところなんて、私を高校一年生の女の子だと思っていない証拠だ。三歳の頃からの付きあいなら仕方がないのかもしれないが、胸中は複雑である。

純也さんは私を抱き上げたままソファアへと腰かけた。

「あのね……もう子どもじゃないんですけど……」

「わかってるよ」

本当にわかっているとは思えない。小さな妹としか思っていないくせに。

目の前の彼は、そんな私の複雑な乙女心にまったく気がついていない様子で、くすくすと笑いがら言う。

「ふゆは髪の毛も肌も柔らかいな」

純也さんは私の頬をぶにぶにと突いてくる。

「ほっぺた丸いの気にしてるんだから！」

「そうか？ 可愛くて食べたくなる」

頬に唇が触れて甘く噛まれる。ちゅつと水音がして頬がかつと火照^{ほて}ってきた。

さすがにお父さんとお母さんが見ている前ではしないけれど、純也さんは私と二人きりだと特別に甘くなる。

昔からほっぺにチューは当たり前だった。率先して自分からしていたくらいだ。それというのも、五歳くらいの頃、お姫様ブームだった私が、王子様からのキスが欲しくて度々^{たびたび}キスをねだったからだ。私にとつての王子様は一人だけ。ターゲットは常に純也さんだった。

さすがにこの年になると自分からはできないが、どうやら彼は違うらしい。それもこれも私の見た目が変わっていないからだ。恨めしい。

(私にとつてはこれだってキスだよ……)

頬に唇が触れるたびにドキドキしているし、できれば唇にしてほしいと思っている。私がそんな風に思っているなんて、きつと彼は考えもしないのだろう。

胸がチクリと痛んだ。

「そろそろ勉強しようか。ふゆの成績を上げないと、遊びに行けないからな」

「お願いします、先生」

私が純也さんの膝から下りようとすると、腰に回された腕はそのままに彼が立ち上がった。思わず首にしがみついてしまう。

「……っ！ もうっ、急に立つからびっくりした」

「そう？ ごめんな」

そう言つて先ほどとは反対側の頬へと口づけてくる。純也さんは私を抱き上げたまま階段をゆつくりと上がり、廊下の左側のドアを開けた。そこが私の部屋だ。部屋に入ってようやく下ろされる。

うちは一般的な3LDKで二階は両親の寝室と私の部屋だけだ。一応隣りあう壁側はウォークインクローゼットになっていて、テレビの音などはそこまで聞こえない。一階はリビングダイニングと和室、それにキッチンだ。

「そういえば、ちゃんと家庭教師代もらつてる？ お母さんなんでもかんでも純也さんに頼むから、ちゃんと請求した方がいいよ？」

私は机を前にして椅子に座り、純也さんは慣れた様子でベッドに座る。クローゼットにはパイプ椅子もあるのだが、出すのが面倒なのか彼はいつもこうだ。

「大丈夫。ちゃんともらつてるよ。でもふゆが勉強して結果を出さないと、ほかの人に代えられるかもしれないな」

「えええ〜お母さん、純也さんのこと大好きだからそれはないでしょ」

「小さい頃から知ってる分、成績が上がらなかつたら、二人で遊んでたつて思われるかもしれないだろ？ ふゆ次第だ」

子どもの頃、たしかに私たちは遊んでばかりいた。庭で鬼ごっこやかくれんぼ。それに水遊び。純也さんの部屋にはカードゲーム一つなかつたから、私がいろいろと持ち込んでいた。

「週に三日来るから、次の時まで俺が出した課題を終わらせること。わかったか？」
週に三日も会えるらしい。大好きな人と誰に憚ることなく一緒にいられるなんて、成績が下がってラッキーと思ってしまうた。

「お前今、成績が下がってラッキーって思っただろ？」

「思っていないよ！」

「バレバレなんだよ。ちよつと甘やかし過ぎたかな」

お仕置きだと鼻を摘まれる。ただでさえ低い鼻が今以上に低くなったらどうしてくれよう。

「が、頑張る……からっ……やめて」

まったく痛くはなかったが、好きな人に鼻を摘まれるなんて、そして変な顔を見られるなんていたたまれない。

「ごめん」

私が涙目になったのがわかったのか、純也さんが今度は鼻の頭にキスをしてきた。

一瞬、唇同士が触れあうかと思つてびつくりした。でもすぐに彼の顔は離れていつて、私はほつと息を漏らす。

私と純也さんでなにか起こるはずもないのに、少しだけ期待してしまった。

(これまで、一度だつて本当のキスなんかされたことないのに)

私の両親にだつて、年頃の娘と二人きりにしてもなにも起こらないと思われるくらい、純也さんは信頼されているのだから。

「で、これ、期末の結果か？」

純也さんは、私が机の上に出しておいたテスト用紙を一枚ずつ捲つていく。

「そんなに悪くないけど……ふゆ、英語苦手？」

私は軽く頷いて肯定した。

母によると、純也さんは大学でそれはもう優秀な成績を修めているらしい。大学でもキャンキヤー言われているんだろうな、なんて想像が頭を駆け巡り、私はますます落ち込みそうだ。

「どうしようか。おばさんからは夏休みにみっちりやってくわつて言われているけど、夏休みだけじゃできること限られるしな……」

「でも、純也さんだつて自分の勉強があるでしょ？ 成績落ちたら滋さんに怒られちゃうんじゃないの？」

純也さんのお父さんである滋さんは、私には優しいけれど一人息子の純也さんには厳しかった。大学の合格発表の日も、合格していて当然と結果すら聞かなかつたらしいから。

でもそれは、純也さんが陰で相当努力しているのを、ちゃんとわかっているからに違いない。

「そんなへまするわけないだろ。で、ふゆは今後どうしていきたい？ 大学受験を視野に入れるなら、それなりのカリキュラムを組まないとな」

「大学……」

大人になってどうしたいか。

なんのビジョンも浮かんでこない。子どもの頃は、将来は『純也お兄ちゃんのお嫁さん』以外、

考えていなかったが。

「それとも……大学には行かずに俺と結婚するか？ 小さい頃よく言ってたよな？」

「……っ」

考えを見透かされたのかと思つて、驚愕に言葉が詰まる。どうして急にそんな話をしてくるのだろう。純也さんはからかっているだけかもしれないが、密かな恋心を抱いている私は動揺を隠せない。私は耐えきれず純也さんから目を逸らした。

「そつ、それは……っ！ 子どもの頃の話でしょ！」

私は、妹扱いしてくる相手に「結婚したい」なんて言うほど愚かではない。彼が本気でそんなことを言っているだなんて期待もしない。そう自分に言い聞かせる。

「子どもの頃の話、ね。今は、まったくそう思わないのか？ 寂しいもんだな」

「え……っ!?」

シミ一つない透き通るような白い肌が眼前に迫り、私は息を呑んだ。彼の唇が私の唇に触れそうな距離まで近づいて、心臓がバクバクと激しく音を立てる。

つい背中を仰げ反らせると、彼はさらに距離を詰めてきた。ぐらりと身体が揺れて後ろに倒れそうになり、近づいてきた純也さんに腕を引かれる。

「危ないだろ」

私に向ける言葉はいつもと変わらない。けど、その声は低く艶めいていて、私を見つめる目はたしかに熱を孕んでいる。顔が近くて、息をすることもできない。

目を瞑つたらなにかが起こりそうな予感があるのに、私はただただ彼の顔を凝視していた。純也さんがまるで知らない男の人に見えて、どうしていいかわからなかったのだ。

顔が火照つて熱い。

いっばいいいっばいになった感情が堰を切つて溢れだす。頬ではなく唇にキスをしてほしい、そう望んでいたはずなのに、彼の唇が触れそうになった瞬間怖くなり、涙が滲んでくる。

すると、あつさりと掴まれていた腕が放されて「ごめん」と告げられる。

「泣かせたいわけじゃないから。その話はまた今度な」

私の真つ直ぐに伸びた髪を一筋すくわれて、耳元で囁かれた。耳に唇が触れそうな距離に驚き、つい避けてしまった。すると苦笑した純也さんは身体を少しだけ離して机に視線を向けた。

「じゃあ、勉強しよう」

頭の中は激しく混乱していて、とても勉強できる状態ではなかった。

先ほどまでの会話が嘘のように、純也さんは淡々と英語の文法の説明を始める。私は頬を真つ赤に染めたまままだじつと机に向かうしかない。

(さっきのは、いっばいなんだつたの……また今度つて?)

ノートを広げてはみたものの、英文法など頭に入つてこない。だが、純也さんが優しいながらも厳しい家庭教師だったため、そんなことも言っていられず、英語と数学を時間いっぱい叩き込まれることになった。

室内にかりかりとペンの走る音しか聞こえなくなつてから数時間。疲れと眠気で頭がぐらぐらし

てくる。

「うう……私、なんでこんなに勉強してるんだろ」
勉強し過ぎて頭の中がしっちゃんかめっちゃかだ。

動揺していた心が、落ち着いたのはいいのだが、頭を使い過ぎて疲れは倍増。

私が机に突っ伏すと、純也さんの手が伸びてきて頭をぼんぼんと叩かれる。

「じゃあ、今日はもう終わりな」

「本当っ!？」

私がガバツと起き上がり満面の笑みを浮かべると、純也さんはやれやれと呆れ顔だ。

「そんな嬉しそうな顔すんな、課題は出すからな」

「はい」

嬉しくない返事なのがバレバレだったのか、純也さんは顎に手を当ててなにか考えるように「そうだな」と口にした。

「なにか、目標を持ってみたいんじゃないか？」

「目標……?」

私には試験でいい点を取る、以外思いつかない。

「将来こうなりたいでもいいし、どこの大学に受かりたいでもいい。なんのために勉強するのか、目標をはっきりさせることで、やりがいに繋がる」

「純也さんはあるの? 目標」

「大学在学中に国家公務員採用総合職試験に受かって、官僚コースだな」

まだ大学生一年生なのにそこまで考えているなんて。

「でも、その前に……」

なぜか純也さんは、意味ありげに私の顔を見て微笑んだ。

「……?」

「……ふゆは、なにかないのか?」

(大人になったら……私はなにになりたいんだろう)

私も、純也さんみたいに目標を持って頑張りたい。漠然とだが、そう思った。

それに、目標を持って頑張ったら、いつか妹扱いではなくなるかもしれない。少しは彼に近づけるかもしれない。

(最終目標は、純也さんと結婚する……なんてね)

まずは手に職を……と考えると、看護師しか思いつかなかった。看護学科のある大学なら受かる可能性はゼロではない。

それにだ。風邪を引いた純也さんを私が看病できるかもしれない。頭の中でそんな妄想を繰り返している、無情にも重い紙の束が渡される。

「とりあえず、これ課題。三日後までな」

「うええ〜多過ぎない?」

「俺とデートしたくない? せつかくの夏休みだし、俺はふゆと出かけたよ。そのためには、結

果を出さない」と

そう言われたらやるしかない。

その後、私は純也さんから出された大量の課題に追われ、机に向かう時間が増えたからか、お母さんは多少遊んでもなにも言ってもなくなった。

夏休みが明けた九月中旬の土曜日。

今日は午前中から松坂邸にやってきている。

家庭教師を頼んでいるのは平日の三日間だが、どうしても純也さんの都合がつかないため、土曜日に授業をすることになった。平日よりも一緒にいられる時間が長いので、私としては大歓迎だ。門を潜ると、庭で滋さんが、池の鯉に餌をあげていた。

「滋おじさん、おはようございます。お邪魔します」

滋さんは私に向かって軽く手を振ってきた。小さい頃はわからなかったが、穏やかな笑みを浮かべている顔は純也さんとうり二つだ。それに濃紺の和装姿は妙に貫禄があって、滋さんを前にすると背筋が伸びる。

顔馴染みのお手伝いさんへ挨拶を済ませてキッチンへ行くと、純也さんのお母さんがボウルで生クリームを泡立てていた。

「鈴子さん、おはようございます」

鈴子さんは朝から趣味のケーキ作りをしているようだ。家族で食べるにはいささか大きいスポンジと、いちごが大量に載った皿が目に入る。

「ふゆちゃん、いらつしゃい。ケーキ作るから、あとで純也の部屋に持っていくわね」

鈴子さんは私に来るたびにケーキを焼いてくれる。松坂家の冷蔵庫には私のために一年中いちごが入っているくらいだ。どうやらケーキ屋に卸しているいちご農家からわざわざ取り寄せしてくれているらしい。

「いつもありがとうございます」

「俺はいらないから」

「はあ、まったくこれだもの」

肩を竦めて大げさにため息をつく鈴子さんに、私は思わず笑ってしまう。私は、頻繁にケーキを作ってくれるお母さんがいるのを羨ましいと思うが、純也さんはそうでもないらしい。

「ふゆ、行くぞ」

「あ、うん」

キッチンを出て広いリビングを通り廊下から階段を上がる。

純也さんの部屋は二階だ。一階には今は亡くなっているおじいさんと、おばあさんの部屋と、滋さんと鈴子さんの部屋、それに通いのお手伝いさんの休憩スペースがある。

「入って」

「はーい」

南側にある純也さんの部屋は二十畳ほどの洋室だ。勉強机とベッド、大きい本棚くらいしか物がない。

純也さんと二人きりているのは珍しくない。それなのに、ここのところ私は、二人きりの空間がどことなく落ち着かなくなってしまった。何度も脳裏によみがえるのは、怖いくらいに熱を持った純也さんの目だ。普通でいようと思っても、ふとした時に思い出して顔が火照る。

「今日は何時までいられる？」

「べつに用事はないから、いつもと同じで大丈夫」

ハッと我に返りなんでもないように答えると、純也さんの椅子を貸してもらい机に向かう。

「俺も今日はなにも予定がないから、せっかくだし全教科のテスト対策しておくか。昼飯は、母さんが作ってるだろうし。十二時までやって、昼休憩して午後は三時までな」

「ぜ、全教科……五時間……」

顔を引き曇らせる私の横で、パソコンを操作していた純也さんが大量のテスト用紙を印刷し始めた。

「今日も勉強三昧らしいと項垂れていると、そつと頭を撫でられる。鉛と鞭はばっちりだ。なんだか弄ばれているようで悔しい。」

「ふゆは中学の英語で、教科書を丸暗記してテストを乗り切ったタイプだろう？ 基本的な文法と読解がわかってないから躓くん。単語は暗記でどうにかなるんだから、文法さえ覚えてしまえば英語は簡単だよ」

純也さんは机に手を突いて、私のすぐ横に立ったまま話をする。私の部屋にある椅子より座る位置が高いため、純也さんの顔が近づいてくると耳元に息がかかりくすぐったい。

今までは近くにいてドキドキはしていても、これほどに緊張はしなかった。純也さんの息遣いさえ聞こえてきそうな距離に胸が高鳴り、顔が見られなくなる。私はテキストを目で追うと、慌てて話題を変えた。

「あ、こ、ここっ！ この間、清貴に教えてもらったとこだ。これならわかるよ。放課後、真紀と三人で勉強したんだ」

「清貴？ 男か、そいつ？」

純也さんの声がすつと低くなる。私は高校で新しくできた友人のことを説明する。

「生徒会で一緒なの。清貴は面倒見がよくて、クラスのみんなに頼られてる副会長だよ。あ、そういうとこ純也さんに少し似てるかも！」

私は喋りながらも、必死に問題を解いていく。だから、純也さんがその時、どんな顔をしていたのか気づかなかった。

「お前さ……あまり清貴って男に近づくなよ？」

「なんで？ クラスも生徒会も一緒なんだから、近づかないとか無理だよ」

「そうじゃない。俺にしてみたいに、ほいほい懐くなって言ってるんだ」

隣から聞こえた低い声に驚いて顔を上げると、純也さんは珍しく目を細めて不機嫌そうな表情をしていた。

「……するわけないよ。清貴はちゃんと私が高校生だつてわかっているもん」

私を子ども扱いする純也さんとは違う、と皮肉を込めて言った。清貴は純也さんみたいに過保護じゃないし、私を抱き上げたりもしない。

「俺が、お前を子ども扱いしてるって？ そんなわけあるかよ」

純也さんはさらに声を低くして私の耳にかぶりついてくる。その直後、耳たぶを舌で舐められて、ぞくぞくと不思議な痺れが腰から湧き上がってきた。

「ん……やっ」

突然変わった彼の態度に驚いて、私は思わず腕を突っ張らせる。私を見る純也さんの目がいつもとは違う。どうして、今、あの日と同じような目で私を見るのだろう。

「俺が近づいたら、そうやって怖がつて逃げるくせに」

「だって……耳、囁むから」

私は顔を真っ赤にして口ごもる。

「ふゆ、ちゃんと覚えてるか？」

純也さんが私を真っ直ぐに見つめてくる。怖いくらい真剣な瞳になにを言われるのかと心臓がドクンと音を立てた。

「な、なにを？」

「俺にプロポーズしたこと」

彼がおもむろに顔を近づけてきたことに息を呑む。私が瞬きもせず固まっていると、純也さん

の顔が目の前にくる。

思わずぎゅっと目を瞑ると、唇に柔らかい感触があった。いったいなにが起こったのか。

「あの時のお返し」

驚いて目を開けた私の視界に入ってきたのは、間違いなく純也さんの端正な顔。すぐにまた、ちゅっとわざと音を立てて唇を軽く押し当てられたかと思うと、数秒も経たずに離れていった。

「え……なんで？」

「お返しだつて言っただろ。あとは自分で考えろ」

そんなことを言われても。

嬉しいよりなにより戸惑いが大きい。

今まで、頬やおでこにキスをされたことはあっても、唇にキスをされたことは一度もなかった。(まさか、純也さんも私のことを好き、とか……いやいやいや……待って)

あつという間に、私の頭の中がパニックに陥った。

「あ、れ……？」

目を開けると、自分の部屋とは違うカーテンが視界に入った。

「ふゆ、起きた？」

「あれ……私、寝てた？」

私が慌てて起き上がろうとすると、ベッドの端に腰かけた純也さんが腰に腕を回して支えてくれる。

「五時間も勉強したからな。疲れたんだろ」

そうだった。純也さんからのキスに動揺しパニックに陥った私は、現実逃避とばかりに目の前の勉強に集中した。午前二時間半、お昼ご飯を食べて二時間半。必死に問題を解いているうちにうとうととしてきて、いつの間にか眠ってしまったらしい。ベッドにいるのは、おそらく純也さんが運んでくれたのだろう。

私を見下ろす純也さんは、キスなんてなかったみたいになんとして平然としている。

(純也さんにとっては……キスじゃなかったのかもね)

お返しだと言っていたから、言葉通りなのかもしれない。

一瞬だけ、期待してしまっただじゃないか。

ため息を呑み込み、寝乱れた髪を手櫛で直す。身体にかけられていた毛布を剥ぐと、穿いていたフレアスカートが太ももぎりぎりまで捲り上がっていた。上に毛布が掛けられていたのは、見えないうようにという純也さんの配慮だろう。

「私、どれくらい寝てたの？」

「一時間くらいか。ああ、母さんがケーキを持ってきたから、起きたばかりだけど食べるか？」

「やった、食べる！」

私が嬉々としてベッドから下りると、ホールケーキをその場で切り分けて純也さんが皿に載せて

くれた。その間、私はポットに入ったお湯で紅茶を淹れる。

「いちごは自分で取れるのか？」

「取れるに決まってるでしょ！ そのネタ何度も言うのやめてよ！」

「ふゆが、いちごを食べているところが好きなんだよ。可愛くて。それにしても……変わらないものだな」

純也さんは遠い目をして懐かしむように私の頬に触れてきた。口の中のいちごを呑み込み、私は首を傾げる。

「そりゃ、背は伸びてないし、いまだに中学生に間違えられるけど……気にしてるんだから」

「俺が言ってるのは、そういうことじゃない」

「じゃあどういふこと？」

「俺の気持ち、だよ。昔からちっとも変わってない。小さい頃から同じようにふゆが可愛い」

小さい頃から同じように——は禁句だ。小さい頃から同じように妹として可愛がってくれているのを知っている。かなり溺愛されているのも。

でも、私の気持ちは、変わった。幼馴染みのお兄ちゃんから、男の人に。

落胆していると、頬を撫でていた指が唇へと下り、そのまま私の唇の形を辿るようにつつと指を動かされた。

先ほどのキスを思い出してしまう。

いつの間にか、空気が張り詰めているような気がして動けなくなった。自分の呼吸の音がやたら

と大きく聞こえて、頬が火照^{ほて}ってくる。すると、彼の指が薄く開いた唇の隙間へと入ってきた。
「……っ」

思わず身体を引くと、純也さんは唇に触れていた指を離しふつと鼻で笑った。

「相変わらず、口に生クリームつけてるところも可愛いよな。やっぱり、俺が食べさせてやるのか？」

「クリームなんてつけてない！」

私はその場の空気を替えるように叫ぶと、純也さんの表情も元に戻る。

「ついでるだろ、ほら」

純也さんは手つかずのいちごをフォークに刺して、私の口に押し当てる。いちごの周りについていた生クリームが私の唇にべっとりついてしまう。なんてことをするのだと、私は頬を膨らませて抗議の声を上げた。

「これはつけたって言うんです！ もう、昔は優しくてもなんでもできる完璧な王子様だと思つたのに〜！」

「へえ、優しくてもなんでもできる完璧な王子様ね。そう思ってくれてたのか。そういえば、よくお姫様ごっこに付きあわれたもんな」

純也さんはにやにやと人の悪い笑みを浮かべ私をからかってくる。

「だから、昔は、だってば」

私はつい口から漏れてしまった本音が恥ずかしくて、言い訳のように言葉を続けた。

「完璧な王子様じゃなかったら、ふゆは俺のこと嫌いになるか？」

嫌いになんてなるわけがない。

むしろ私は、いつか純也さんが、私にだけ弱い部分を見せてくれたらどんなに嬉しいだろう、と考えてしまう。

「最初から完璧な人なんているわけないでしょ」

テレビや漫画など、勉強に関係ない物はなにもない部屋。コンポタイプのオーディオ機器も、ラジオの語学講座を聞くために置いてしていると知っている。

この部屋は、勉強をするためだけに整えられた環境なのだ。

滋さんは、勉強をしろと口うるさく言うわけじゃないけれど、いわゆるエリートが歩むレールの上から外れることを許さない人みたいだ。いい大学を出て、純也さんのおじいちゃんのような政治家か、滋さんみたいな官僚の道に進むのを当たり前と思っっているらしい。

「純也さんが完璧なのは、努力あってこそだね？ 私が友達と遊んだり、テレビを観たりゲームをしたりしてる間、純也さんはずっと努力してたんだって……この部屋を見たらわかるよ」

私の言葉に純也さんが破顔した。

「じゃあ、これからも、ふゆに褒^ほめてもらえるように頑張ればいいか」

そう言った純也さんの顔が、意外にも子どもっぽくて、可愛いなんて思ってしまったのは内緒だ。

純也さんに家庭教師をしてもらい始めてから一年と少しが経ち、私は高校二年生になった。

いつの間にか家で勉強をするよりも、純也さんの部屋に来る頻度の方が多くなっていた。

今日は中間テスト前ということで、すでに四時間は机に向かっている。

私が問題を解いている間、純也さんは自分の勉強をしているため、室内はシンと静まり返っていた。

十月に入り湿度は多少低くなったものの、いまだ夏日も多く汗ばむ陽気が続いている。

窓がすべて閉まっているからか湿度を含んだ空気が重く、息苦しく感じる。汗ばんだ肌に生地^{まじ}の厚い冬用のセーラー服が貼りつくのが不快だ。

(暑くて集中できない……)

少しでも涼しい空気を取り込もうと、セーラー服の胸元を引っ張りパタパタと扇^{あふ}ぎつつ、机に向かいペンを走らせる。

『それとも……大学には行かずに俺と結婚するか?』

ふとした時に、純也さんの言葉を思い出してしまう。忘れようと思っても忘れられない。

でも、私たちの関係は昔とにも変わらぬ。あのキスだって、やっぱり夢だったんじゃないかと思ってしまう。ここまで来ると、いい加減片思いを拗^{こじ}らせ過ぎて、私を弄^{もてあそ}ぶ純也さんが恨めしくなってくる。

(相変わらず私のこと甘やかすから……ほかの人に目を向けることもできないんだよ)

「こら、ふゆ。暑いなら窓開けるから、それやめろ」

私が集中できていないことに気づいたのか、純也さんが呆れたような声で言ってくる。

「それ?」

純也さんが私の胸元を指差しながら目を細めた。はしたない、と言いたいのだろう。私が胸元から手を離すと、純也さんは部屋の窓を開けるために立ち上がった。

(私のあるかないかわからない胸に、ドキドキなんかしないか)

自分の考えに空しくなる。

少しは顔色を変えてくれてもいいのに。そんな気持ちで、窓を開ける彼の背中を見つめていると、突然、振り返った純也さんにとんと鎖骨の下あたりを突かれた。

「なに?」

指はすぐに離れていかず、そのままだ。私は純也さんを仰ぎ見る。

「純也さん?」

「今度無自覚に俺のこと誘ったら、襲うからな。そろそろ……自覚してもらわないと困る」

純也さんの指がつつと鎖骨を撫でるように動いて、そのまま下へと下ろされる。触れられた部分がじんと熱を持ってじわりと全身に広がる。

指先が胸の膨らみに触れそうになり、私は椅子から転げ落ちそうになった。

「ひえっ!」

もちろんそんな私を支えたのも純也さんで、腕を引いて仰け反った身体を引っ張り上げられる。

「やっぱり、ふゆにはまだ早いか」

純也さんが苦笑して、兄の顔になる。

また子ども扱いだ。期待しては突き落とされる。いくらなんでもひどくないか？
目の奥がじんと熱くなって、泣きたくないのに目に涙が滲む。

私は、いつものように頭を撫でようと伸びてきた手を掴んで、胸元に引き寄せる。
「ふゆっ？」

いつだって自分ばかりが感情を波立たせていることに苛立つ。少しは純也さんだって動揺すればいいのに。

「襲っても、いいよ」

その時、どうして自分が、そう、言ったのかわからない。ただ、気がついたら口に出していた。

純也さんの顔は見られなかった。どくどくと彼に聞こえてしまいそうなほど大きく、心臓が高鳴っている。

まるで判決を待つ罪人みたいな心地で純也さんの言葉を待つ。

「それ、本気にするぞ？」

私はぼつと勢いよく顔を上げた。純也さんは先ほどまでの兄のような眼差しを消して、熱のこもった瞳で私を見つめていた。

「うん。して」

小さく頷くと彼の指が私の唇に触れた。「いいか」と問うように下唇の上をなぞられる。私が目を見つめると柔らかい純也さんの唇が重なって、私は二度目のキスをした。

「キスするの、二回目だな」

「前のあれ、キスだったの？」

私が問うと、純也さんは顔を引き攣らせて「気づいてなかったのか」と呆れた声で言った。

「当たり前だろ。お前、俺のことまったく意識しないから、すっげえイライラした」

言いながら何度も唇を啄まれる。

まったく意識しないなんて、そんなことあるわけがない。私は常に純也さんを意識していたのに。「いつつ、頬にキスしてくるから、間違えたんだって思ったの……思おうと、したの」

「間違えるわけないだろ。そもそも好きでもない女にキスなんかするかよ。気づけよ」

純也さんは私の身体を緩く抱きしめてくる。

そしてまた唇が近づいて、今度は頬に口づけられた。言われてみれば、彼はどんなに私を可愛がっていても、お父さんとお母さんの前では決してキスをしなかったと気づく。

「何度も言っただろう？ 子ども扱いなんてしてないって。でも、お前は全然信じなかった。溺愛する兄貴でいてほしかったんだろ？」

「違うっ！ 私は……純也さんが、妹としか見てないんだって思って。でも、もう……お兄ちゃんじゃ、嫌だったの」

「俺はもう、幼馴染みのお兄ちゃんではいられないよ。我慢の限界だ。なあ、ふゆ……俺が好きか？」

唇を軽く触れあわせながら聞かれる。互いの息がかかるほどの距離にドキドキして、頬が火照っ

てくる。うつすらと目を開けると、目の前にいる彼も、彼の瞳に映った私も熱に浮かされたような顔をしていた。

「ん……好き」

言葉にしてしまえばたったそれだけのことだ。だが、たしかに彼に気持ちは伝わったようだ。純也さんは今まで見たことがないほど幸福そうな顔で破顔した。

「そうか」

唇はすぐに離れていってしまったけれど、私が手を伸ばすと今度はもう少しだけ長く啄むような口づけが贈られた。

「襲っていいって言っただのに」

私は名残を惜しむように純也さんのシャツを掴んでしまう。

すると身体を離れた純也さんが呆れたような顔をして、私の額を小突いてきた。

「本気で襲うわけないだろ。おぼさんの信頼を失いたくないからな」

黙っていればばれないんじや、なんて私の考えはお見通しだったらしい。

「俺とキスするだけで真つ赤になるふゆが、ばれないでいられるとは思えない。それに、来年は受験だろ」

「わかってるよ!」

私はようやく自分の進路が決まったところだ。お母さんと同じ道を目指し、看護系の大学に行く

ことに決めた。受かるかどうかは神のみぞ知るところだが、純也さんが国家公務員試験に合格したように、私も頑張りたい。

「卒業するまで、セックスはしないからな」

期待しているとこ悪いけど、と彼は耳元で囁いてくる。急に男の顔を隠さなくなった幼馴染みの変貌に、一気に顔に熱が集まってきて涙が出そうだ。

「キスも……しないの?」

私はついねだるような視線を向けてしまう。せっかく長年の片思いが成就したのに、それはあんまりじゃないか。

「セックスは、って言っただろ。キスはするよ」

喋りながら、どちらともなく唇を重ねる。

「一日一回な」

「なんです?」

ひどくないか。と唇を尖らせると、堪えきれない様子で彼が笑う。

「嘘だよ。可愛いな、ふゆ」

そしてもう一度口づけられ、開いた唇の隙間を舌先で舐められる。全身が蕩けてしまいそうほど気持ちがいい。

「ん……っ」

もっとと口を開くと「これ以上したら、いろいろとまずいからな」と苦笑した彼の顔が、離れて

いく。

「なあ、ふゆ。前に言ったこと覚えてるか？」

「前？」

「約束したよな。十八歳になったら結婚しようって」

「そうだけど……」

「だめだよ。約束しただろ？」

純也さんは折り畳んだ古い紙を机の上に広げた。

そこには子どもの下手な字で『こんいんとどけ』と書いてある。そしてその下には私の名前と純也さんの名前。

(これ、まだ持っていてくれたんだ)

「懐かしい……」

「ふゆに、プロポーズされたんだよな」

「うん。結婚すれば、ずっと一緒にいられるって思ったから」

「ふゆが大学に受かるまでは家庭教師でいる。けど、高校を卒業したら、今度は本物の婚姻届を持つてくるから……俺と結婚しよう。そうしたら、ずっと一緒にいられる」

左手の薬指の根元を、彼の指先がとんと突く。ここに指輪を嵌めさせてくれと言わんばかりの仕事に、頬が熱くなった。

「高校卒業って……早くない？」

「早くない。俺は大学を卒業したら実家を出なきゃならない。そうしたらしばらく一緒にいらなくなる。離れるのが不安なんだよ。俺を安心させるためと思って結婚して。ふゆにほかの男が近づかないよう、少しは牽制になるだろ？」

この日初めて、彼が大学卒業後に実家を出て寮で生活することを知らされた。

純也さんの周りにはいつだって女の子がいた。私が知らない間に誰かから告白されるかもしれない。それで不安になってもすぐに会いには行けない。離れるって、そういうことだ。

籍を入れたら、少しは私も安心できるかもしれない。

婚姻届と指輪で彼を縛れるかもしれない。

「うん。私も……純也さんに近づいてくる女の人、いや」

「俺もだよ。お前だけでいい」

両手のひらを重ねあわせて、ふたたび唇が触れる。全身が甘く痺れて、もっともっと触れたい。何度も唇を食まれているうちに、陶然としてきて身体から力が抜けていく。

「本当は、大学なんて行かなくてもいいって思ってる。苦勞させるつもりはないから、結婚して一緒に来てほしいって。勉強頑張ってるのに、こんなこと言っただけでいいよ」

くたりと力が入らずもたれかかる私をきつく抱きしめて、純也さんが苦しげな声を漏らす。

「またそうやって、すぐ甘やかそうとするんだから」

この分では私が働きたくないと言ったら、嬉々として面倒を見そう。さすがの私も純也さんのお荷物になるのは御免である。それに、甘やかされればされるほど頑張らねばと思うのだ。

「仕方ないだろ。そういう性分なんだ」

「ますますやる気出た。私、大学に現役合格して看護師になるよ。純也さんが風邪引いた時は、看病してあげるからね」

私から唇を触れあわせると、純也さんの濡れた唇が深く重なってくる。

徐々に息が荒くなってきたても、口づけが止められない。あらぬところもどかしくなって、私は座ったまま太ももをぎゅつと閉じた。

「……っ、ふ」

自分の口から漏れた声^{こゑ}が艶^{つや}を含み甘く響く。

それが合図であるかのように唇が離された。

「早く……抱きたい」

欲情し掠れた声と潤^{うる}んだ瞳、純也さんのそんな表情を見たのは初めてだった。私だって今すぐそうしたい。でも、それがだめだということもわかっている。

私が色恋にかまけて勉強を疎^{おろそ}かにしたら、家庭教師である純也さんの評価が悪くなる。

「結婚したら……抱いてくれる？」

「もちろん。その日のうちに攫^{さら}いに行く」

そして約束通り、卒業式の日に迎えに来た純也さんにそのまま区役所に連れていかれ、あれよあれよという間に私は人妻になったのだ。

区役所からの帰り道。純也さんと手を繋ぎながら住み慣れた家へと向かっていた。

「なんだか……全然実感ない……婚姻届って、出して終わりなんだね」

左手の薬指に嵌^はめられた指輪を目の前に翳^かしながら呟くと、純也さんが繋いだ手を持ち上げ私の手の甲にキスをした。

「まあ、書類の手続きだけだからな」

入籍前、お父さんとお母さんに結婚の挨拶^{あいさつ}に来た純也さんは、すぐに結婚式を挙げられないこと、お母さんは私がずっと純也さんを好きでいたのを知っていたし、私の成績がぐんぐん上昇したことで純也さんへの信頼は厚かったから小躍りしそうな雰囲気だったが、お父さんは複雑そうだった。

それでも相手が純也さんだから、高校を卒業してすぐの入籍を反対されなかったのだ。それに滋さんと鈴子さんも、私と純也さんが結婚することを喜んでくれた。かなり前から純也さんは私と結婚するつもりであることを話していたらしい。

「帰る家もばらばらだし」

「寂しい？」

拗^こねているのがばれたのか、繋いだ手をきゅつと強く握られる。

「うん……でも仕事だから、仕方ないってわかってる」

無事、国家公務員採用総合職試験に合格した純也さんは、滋さんと同じ道を進み警察庁へと入庁

した。これから警察大学校で寮生活が始まるため実家を出る。

それから各都道府県警察か警察庁での勤務になる。つまり一つのところに留まらない。各都道府県警察はどこに行くかもわからないらしい。

私は私で看護師になるための大学生活が始まるから気軽に会いには行けない。

「お前は本当にいい子だよな。俺を困らせるようなわがママを言ったことは一度もない。それが寂しいって言ったら驚くか？」

「いい子じゃないよ。私だって寂しい」

「俺はそれだけじゃ足りないんだよ。毎日顔を見てキスしないと、ふゆ欠乏症になりそうだ」

純也さんがそんなことを言うものだから、堪えていた涙が溢れそうになる。私だって全然足りない。恋人になっても私は受験勉強で忙しく、デートすらままならなかった。

彼に勉強を教えてもらっているのに、いちゃいちゃしたいとか不埒なことを考えていて受験に落ちたら結婚できない。だから雑念を振り払ってひたすら勉強をした。

「じゃあ……お願い、聞いてくれる？」

純也さんは忘れているかもしれないが、私はこの日をずっと待っていたのだ。

「ふゆのお願いなら、どんなことでも」

「部屋で二人きりになったら、いっぱいキスして」

首が疲れるほど上を向いて背伸びをする。純也さんのシャツを掴むと、腰を支えられひよいと持ち上げられた。そしてすぐさま唇が塞がれる。

「ん、んんっ！」

ここでしてなんて言っていない、と目を見開く。実家の近くだというのに、純也さんは構わず口腔に舌を捻じ込んでくる。

「へ、部屋でって言った！」

「部屋でもするよ。もう我慢しなくていいんだ。ようやくお前を抱ける」

ちゃんと覚えていてくれたらしい。

頬を染めて頷くと、その足で私の実家へ来た。今日は平日で、夕方の六時を過ぎるまでは誰も帰ってこない。今はまだお昼を過ぎたばかりで、時間はたっぷりある。

純也さんの家は広いけれど、鈴子さんやお手伝いさんが必ずいる。

勉強場所を純也さんの部屋に変えたのもそのせいらしい。二人きりだと思えば、つい押し倒したくなってしまうからと、ベッドの上で服に手をかけながら彼が言った。

セーラー服を脱がされて、私は両手を交差し胸元を隠す。自分の身体が人からどう見られるかはわかっている。胸が大きいとはとても言えない、ぎりぎりのBカップ。胸もお尻も子どもみただ。

「ねえ、私……本当に胸ないよ!? 純也さん、こんなんに興奮できる？」

緊張し過ぎてこぼれでた言葉は、あまりにもはしたない。純也さんは珍しく顔を赤らめて、手のひらで顔を覆った。

「お前な……」

純也さんは着ていたポロシャツを脱ぎ、私のキャミソールの肩紐に指をかけた。キャミソールに

隠れた胸の谷間を露わにしつつ、穿いていた黒のパンツの前を寛げる。

「興奮できるかどうか、これなら一発でわかるだろう？」

彼の動きにつられて視線を下肢に移す。明らかに通常の状態ではない、膨らんだボクサーパンツが目に入ってきた。

「え、あ……」

「胸の大きさなんか、気にしない。好みって言うなら、ふゆの全部が好みだよ」

キャミソールをたくし上げられ、ブラジャーのホックが外される。覆い被さってくる純也さんの重みを受け止めながら口づけを交わすと、手のひらで薄い胸元を包み込まれた。こうして触られるのは初めてで、恥ずかしいよりも感動してしまふ。

「痛いとか、気持ちいいとかちゃんとやって。初めてだからわからないんだ」

「初めて……って、私が？」

予想外の言葉に目を丸くする。

「決まってるだろ。ふゆ以外の誰とこんなことするんだよ。だからちゃんと教えて。我慢するなよ」

言いながら彼は寒さで勃ち上がった乳首を指先で弾いてくる。

「ん……っ」

「いいな、可愛い声」

自分でも驚くほどの甘い声が漏れでてしまう。お風呂で洗っている時はなんとも思わないのに、

どうして純也さんに触られるとじんじんするのだろうか。

体重をかけないように私の顔の両側に手を突き、顔が近づいてくる。下唇を舌でねっとり舐められ、軽く噛まれる。つんと舌先で唇をノックされると、開いた隙間から舌先が滑り込んできた。

「はあ……んっ」

何度もキスはした。いつも純也さんとキスをするだけで、身体が甘く痺れてしまふ。お腹の奥の方が切なく疼いて、はしたなくも秘めた部分がしっとり濡れて、自分で触りたくて堪らなくなる。私もおずおずと舌先を差したすと、彼の舌に絡めとられ根元からしゃぶられる。美味しいと言わんばかりにちゅふちゅふと上下に舌を扱かれ、キスだけで呼吸が上がっていく。

「はっ、ん、んっ……じゅ、んやさっ」

全身が熱く昂り、頭の中で心臓の音が鳴り響く。目の奥がじんと熱くなって悲しくもないのに涙が溢れそうだ。

もつと彼に触れたくて、伸ばした手を純也さんの背中に回す。そんなつもりはなかったのに、抱きあった拍子に純也さんの勃ち上がった陰茎に膝が触れてしまふ。びくりとして慌てて膝を引く私に対し、彼はこれ見よがしに昂った下肢を押し当ててきた。

「ん、擦るの……っ、恥ずかしい」

純也さんが、私で興奮してくれているのは嬉しい。でも、そうされるとなんだか足の間が落ちて着かなくなつて、変な声が漏れそうになる。

「恥ずかしい？ 俺も、一緒だよ……触ってもいけないのに、もう達きそうなくらい興奮してる。

なあ、ふゆも少しは気持ちいいか？」

気持ちいいに決まっている。私は目を潤ませながらこくりと頷いた。ふたたび純也さんからキスが贈られて、今度は私から舌を絡めた。

「キス、気持ちいいな」

興奮に掠れた声で囁かれると、重苦しい疼きが迫り上がってきて淫らな愛液が溢れだす。シヨーツが水気を含んでじつとりと肌に張りついて、知らぬ間に腰をくねらせてしまう。

「はあ……ん、んっ、気持ちいい」

「こっちは？」

指の腹で硬くしこる乳首を擦られた。

「あつ、んっ！」

思わず、首を仰げ反らせて反応してしまう。

「よさそうだな」

純也さんが私の反応を見て嬉しそうに笑うから、羞恥でいたたまれなさが増す。

尖った乳首ばかりを弄られる。指の腹で捏ねたり、少し強めに引っ張ったり。私がどのくらい感じていたか観察するみたいに。

はあはあと肩で息をしながら愛撫に耐えていると、今度はつんと尖った乳首を舌先で転がされた。「あああつ……」

肩を掴んだ手に力が入る。背中が浮き上がり、腰を彼に押しつけるようにして揺らしてしまふ。

それに気を良くしたのか、純也さんは執拗に乳首ばかりを責めてくる。ちゅぱちゅぱと唇を使ってしゃぶっては、反対側を指先で弾く。

「あつ、はあんっ……ん、んっ」

えも言われぬ心地よさが腰から頭の先まで突き抜けてくる。四肢から力が抜けて、ねだるような甘い声が止められない。頭を左右に振りながら、彼の髪をぐしゃぐしゃにかき回す。

熱っぽい息を漏らす純也さんが、飴玉をしゃぶるように夢中になって乳首に吸いついてくる。そして乳房を手のひらで押し上げつつ、反対側の乳首を指先で押しつぶすように弄られた。

「はあ、はっ、ああっ……そこ、ばっか……もっ」

胸を弄られているのに、秘めた部分が疼いて我慢できなくなってくる。純也さんの屹立が太ももに当たるたびに、膣からとろとろと蜜がこぼれてシヨーツを濡らしていく。

純也さんにキャミソールとブラジャーを取り払われ、シヨーツを引きずり下ろされる。思った以上に濡れているのか、シヨーツを脱いでも下肢の濡れた感覚は収まらない。

「指……痛かったら言えよ」

そう言われて、指先でそつと陰唇を撫でられる。ぬるりと指先が滑ったのがわかり一気に顔に熱が集まった。純也さんは、そんな私を心配げな様子で窺い見てくる。

「ちゃんと濡れてる。感じてくれていてよかった」

「気持ちいいから……っ、言わないで」

私が目を潤ませながら訴えると、今気づいたとばかりに「ごめん」と謝ってくる。本当にただ心